

千歳飴

お子さまの成長を祝う七五三の儀。千歳飴はその御祝いに華を添える縁起物として親しまれてきました。

Q　榮太樓の千歳飴はいつ頃から販売しているのですか。また、袋に描かれている意匠についても教えてください。

A　「梅ぼ志飴」をはじめ、数多くの飴を製造してきた榮太樓ですが、千歳飴の取扱いをしたのは戦後、昭和29年（1954）のことです。それ以前、戦前には千歳飴を小さく叩き切った「ぶつ切り飴」が盛んに売られていましたが、当社では千歳飴そのものは製造していなかったようです。

千歳飴の由来には諸説ございます。一説によれば元和元年（1615）、豊臣氏滅亡後に遺臣・平野甚左衛門の子である九郎重政が大阪平野において「平野飴」を製造し、後に江戸に下って浅草寺境内でこれを売り「千歳飴」と名付けたといわれています。また別の説では、元禄から宝永（1688～1711）頃、江戸・浅草の飴売り七兵衛が、自らも商品を「千年飴」あるいは「寿命糖」と名付けたことに始まるとも伝えられています。当初は嬰児（みどりご）の宮参りの際に、神社の門前などで売られていたことから「宮参り飴」とも呼ばれていましたが、やがて十一月の七五三詣でも求められるようになり、現在のように七五三の定番として定着しました。



榮太樓の千歳飴の長袋は、能の演目でもある高砂に登場する尉（じょう）と姥（うば）、さらに鶴や亀といった長寿を象徴する意匠をあしらっている点が特徴です。昭和39年（1964）には、この尉と姥の意匠を、子どもが主役となる華やかな行事にふさわしいものとするため、あえて稚児人形風に表現した現在のデザインへと改められたと聞いております。

もともと千歳飴は、神社の門前の露店などで売られるものであったため、戦前までは小売店での取り扱いは多くありませんでした。戦後いち早く榮太樓が千歳飴の製造を開始し、店頭での予約販売を行うとともに、明治神宮、赤坂日枝神社、武蔵一宮氷川神社（大宮）、鶴岡八幡宮等々各神社への納入を進めたことは、今日の流通の広がりを考えるうえでも画期的な取り組みであったと伝えられております。

2026年10月